

負けませんから

と言い張る顔のいい女の子を、

全力で屈服させる

百合のお話

作 みかみ てれん

画 未幡

プロローグ

声援が乱れ飛ぶ二百メートルトラックの上で、私——紅羽彩良は大きく深呼吸する。

『がんばってくださいー！ 紅組ー！』

『紅羽さまー！』

吹き抜ける秋風が、火照った肌に心地いい。

隣のレーンに立つ美少女、稀篠瑠衣まれしのるいが微笑みかけてきた。

「紅羽さんは運動ならなんでもできると聞いておりますけれど、しかし今回は個人戦ではなくチーム戦。青組の結束を見せてあげます」

言葉遣いが丁寧なので、一見、堂々としている挑戦状みたいに聞こえるけど、そうじゃない。実は裏の意味がある。私相手にだけはね。

いくらあなたの運動神経いいからって、ここからの逆転は無理ですよ、と上から目線の挑発かな。

「私を信頼して託してくれた紅組のためにも、全力を尽くすわ。アンカーの大役だもの。稀篠さんもそのつもりでしょう？ 一緒にがんばりましょうね」

貴女こそ足速くないくせにどうしてアンカーやっているの？　と言ったつもり。

十分に伝わったようだ。彼女は頬を染めながらも、リレーに集中するようなフリをしてプイと横を向いた。そのあとに、ぼそりと。

「……無理に張り切りすぎて、お体を傷めないよう気をつけてくださいね。皆様に愛さ
れている『ベル・フルール』さま候補のあなたの体は、学園の宝なのですから」
つまり、これだけの差がついてるんだから諦めたらいかが？　ということね。

普段の赤みがかった髪をポニーテールにまとめた私は、なるほど、と思う。振り返れば、本来は稀篠瑠衣の代わりにアンカーだったであろう走者は割とぶっちぎりで、青組の勝利を牽引していた。

体育祭、最終戦のリレー。トラックの回りは生徒で大混雑だ。全校生徒がこのプログラムを見るために、集まってきている。

否が応でも盛り上がるここ一番の舞台。紅組は苦戦どころか、最下位なのよねえ。
ま、そのほうが燃えるっちゃ燃えるわ。

それではお先に、とばかりにバトンを受け取った瑠衣が走り出す。彼女が俊足ではないと言っても、陸上部などから見たら話であって、高校二年生の平均は余裕で上回る。フォームだけなら、学園一かもしれない綺麗な走り姿だった。

瑠衣がトラックに飛び出た直後だ。割れんばかりの歓声が運動場を包み込んだ。

『稀篠さまー！ ファイトですー！』

『フレフレ青組！ フレフレ青組！』

わかっていたことだけど、走るだけでこの声援。すごい人気だ。芸能人じゃないんだから、と思ったけど、下手したら彼女はこの学園において、芸能人よりよほど人気がある。本当に、愛されてるわね。

いいよいいよ、これぐらいは先に譲ってあげよう。

私の横を黄組と白組が駆け抜けてゆく。紅組の出番は少し遅れてやってきた。息も絶え絶えに苦しそうなごめんなさいの表情で駆けてくる一年生の子。バトンを受け取った私は柔らかに微笑んだ。

「大丈夫、後は任せて」

力強く地面を蹴って、駆け出す。

まるで私の背中を押す『きゃー！』という黄色い叫び声。私は風すらも追い抜くように、グングンと加速してゆく。あつという間に白組の子を抜き去った。

会場内の子たちは熱狂的な歓声をあげる。まるでライブに集まってくれたファンのようだ。カーブを回りながらさらに前へ。

黄組の子を三位に落とした時点で、盛り上がりは最高潮に達した。なんせ、この学園で最も愛されているふたりが、雌雄を決する瞬間がやってきたのだから。

紅羽彩良への大きなエールは、前を走る瑠衣にも届いているだろう。私にも瑠衣の背が見えてきた。こういう場合、追うほうが精神的にはすごく有利だ。けど、その程度の揺さぶりが彼女に通用しないのは、私が一番よく知っている。

猛追する。一步ごとに彼女との差は縮まる。

なのに、距離が足りない。最後の直線に入ってしまった。瑠衣の揺れる青いリボンは、すぐそこにあるのに。

私は負けられないのだ。応援してくれる女の子たちのために。

なによりも、自分自身のプライドのために。

迫るゴールテープ。もはや悲鳴のような歓声。駆動する手足。なにもかもがスローモーションで映る中、見えていた瑠衣の背中が、いつの間にかそこにはなく。

一步で並ぶ。

二歩目で抜く。

三步でゴールテープを切った。

『きゃああああああああああ！』

という大歓声に包まれて、私は気づけばその場に膝をついていた。

勝った。勝ったぞ、ふふふ……。稀篠瑠衣を下してやったわ……。高笑いしたい気分だ。達成感で胸が満ち足りる。

って……ダメダメ、今は人前だもの。もっと毅然としてなきゃ。

よろめきながら立ちあがる。さすがにエネルギーを使い果たしちゃった。肩を誰かが支えてくれた。

「まさか四位からの大逆転を果たすなんて。参りましたよ、紅羽さん。さすがあなたは瑞みずがはらヶ原学園の誇りですね」

「……稀篠さん」

息を切らせた瑠衣が肩を貸してくれる。すると、私がゴールしたのと同じぐらいの歓声があがった。

万雷の拍手はいつまでも鳴り止まない。

腹の中はともかくとして、私は彼女に屈託なく微笑む。

「ふふ、ありがと。貴女がいてくれたから、とても楽しかったわ」

「それは……こちらこそです」

瑠衣も清らかな笑顔でそれに応えてくれた。

紅羽彩良と稀篠瑠衣が肩を寄せ合う姿は後に写真部によって配られ、その配信データは歴代部史上一位を記録したとか、しなかったとか。

で、だ。

「……ちよつと、なに私の手柄に横入りしようとしているの」

「あら。わたしは倒れ込んだ彩良さんに手を差し伸べてあげただけです。感謝されることはあっても、批判されるいわれはありません」

私たちはこうして、薄暗い体育館倉庫の中で顔を突き合わせている。

体育祭の片付けもあらかた終わり、夕暮れ時。外からは帰宅する生徒の音がする。私たちは体操服のまま、居残っていた。

「彩良さんこそ、わたしがいたから楽しかった、なんていじらしいことを言っていたじゃないですか」

「楽しかったわよ。ラストに貴女を抜き去ることができたんだから、最高の気分だったわ。いい？ 勝ったのは私。なのにどうして声援は二分割なの？ おかしいでしょ？」

「みなさんが喜ぶのは、ただ勝つだけのことではなく、結局のところドラマ性ですからね。あるいは、本当はわたしが勝つところが見たかったら、かもしれませぬね？」

にんまりという笑み。挑発するようなその瞳に、私の頭の中でカチンという音がした。言ってくれるじゃないの。

ドンと壁に手をつく。間に挟まれた溜衣が、うつ、と尻込みするような目で私を見上げた。

「ふうん……。溜衣ってばまだ生意気に、そんなこと言えるのね……。さんざん私にし

つけられておいて。それとも、されたいからわざと反抗的な態度を取っているの？」

「は？　そ、そんなわけがないじゃないですか——」

顎をクイと持ち上げる。柔らかかそうな彼女の頬には赤みが差していた。

薄暗い倉庫の中で、溜衣の美貌だけがキラキラと輝いているようだった。

本当にこの子は、顔がいい。こちらをキッと睨みつけるような眼差しも、不機嫌そうに釣り上げた眉も、スツと通った鼻筋も、なにもかもが唯一というバランスで配置されている。お澄まし顔の溜衣も魅力的だけど、私は素の溜衣のほうが好きだ。

誰も知らない溜衣を好きにしているというのが、ゾクゾクするから。

「んっ、んんっ！」

口づけする。最初は驚いたように目を開いた溜衣だったけど、すぐに私を受け入れる。なんととっても、キスぐらいなら慣れたものだ。

膝を溜衣の足の間に割り入れる。体操着の彼女の生足に、私の足が絡みつく。唇だけじゃなくて、全身で溜衣の体温を感じる。

「ん……ふあ、あふ……さら、さん……」

とろんとした潤んだ瞳が、私を映し出す。

私たちの間に流れていた険悪な雰囲気も、どこかに吹き飛んでいた。そういう特別な『契約』なのだ、私たちの関係は。

髪を撫でてあげる。甘えるように頭を差し出す瑠衣は、かわいらしかった。

まだ生徒がたくさん残っている学校で、学園で最も愛されている人気者のふたりがみだらなことをしているなんて、世界中の誰も知らないだろう。

胸の奥が熱くなる。高ぶりが押さえきれなくなってくる。

瑠衣の胸元に顔を埋める。

「やつ、ちよ……汗かいたばかり、なのに……」

「甘いよ」

「だめ、です……っ、彩良、さん……」

「嫌がっているのは、言葉だけね」

「……それは、どうでしょうね？」

「え？」

突き飛ばされた。押し倒される。後ろにはマットが敷かれていたから、怪我とかはしなかったけど、いきなりだったから驚いた。

「まったく……もう学校ではしないって言っていたじゃないですか。本当に、はしたないお姫様ですね」

手の甲で口を拭う瑠衣。腰の上にまたがられて、私は身動きが取れなくなる。

見下ろす瑠衣の目は、妖しく輝いていた。

こ、こいつ……。

体を倒してきた瑠衣は、そのまま私にキスを浴びせてきた。

それだけじゃない。彼女の白い指は私の首筋から胸元。お腹をつつつ……と撫でて、その下へと。って、ちよつと。

「ば、ばか……こんな、ところで！」

声を荒げて止めようとしたんだけど、すぐ窓の外から話し声が聞こえてきた。

「きょうの紅羽さま、本当に麗しかったですね……」

「ええ、最後のリレー、とても胸が弾みましたわ」

慌てて自分の口をふさぐ。換気のために、倉庫の窓は開かれているから、少しでも物音を立てれば聞こえてしまう。もし覗き込まれたら、おしまいだ。

なのに、この女は止めようとしなかった。体にわだかまった熱をかき回すように、体操服の中に手を入れてくる。

「っ！ ちよつと、瑠衣……さすがに、怒るわよ……っ！」

小声で怒鳴ったのに、平然としてやがる。

「だめですよ……ほら、大人しくしててください、みんなにバレちゃいますよ……？」

「だったら……貴女がやめれば……ちよつ……んっ」

しなやかな指が、私の柔らかい部分を弄る。

「ああもう……貴女は、される側でしょ……！ 大人しく、私の思い通りに！」

「あなたこそ、さっさとわたしに服従してください。往生際が悪いですよ、彩良さん。諦めたら幸せになれるんですから。ほら、なにも考えず、わたしになにもかも委ねてください。ねえ？」

「……瑠衣こそ、こないだのこと、もう忘れたの？ 泣きながら私に、もうやめて、許して、これ以上されたらおかしくなっちゃう、って抱きついてきたじゃない。しつけないっていいワンちゃんでも、もう少しお利口さんにするわよ」

わたしと瑠衣は、うふふ、ふふふ、とくぐもった笑みを浮かべて笑い合う。

その後ろを学園の女学生たちは、おしゃべりしながら通り過ぎていった。

「紅羽さまと稀篠さま、いったいどちらがベル・フルールさまになるのかしら……」

「そうね、どちらが選ばれても、祝福しましょう」

「ええ、もちろん！」

夕焼け空の下。外から聞こえてくる純粹な子たちの夢を砕くような笑顔で、私たちは笑い合っていた。

——そう、すべてはこの学園で最も愛されている称号『ベル・フルール』を手にするために。